

「スルタン」の復活？－フィリピン・マラナオ 社会における伝統的称号の活用

辰巳 頼子

Revival of Sultan? Various Claims for Traditional Leadership among the Maranaos in the Philippines

Muslim population in the Philippines is composed by several ethno-linguistic groups such as Magindanaos, Tausugs and Maranaos, and had no unified ruler or language which binds all the inhabitants. For Magindanao and Tausug societies, there were rulers called *sultan* who maintained political and religious authority of each society by monopolizing sea trade. Among the Maranaos, however, there was no single sultan who controlled the whole area. Today, as clan politics divide the area further, the Maranao society sees more sultans claimed by communities of all sizes. Claims for legitimate sultan-ship seem to accelerate process of inventing tradition among the Maranaos.

This paper focuses on three Maranao sultans whose areas of control vary in size to analyze how each sultan recognizes his status and governance. For the first two of the three sultans, claims for sultan-ship are to offer them a broader access to the national polity. The last sultan case shows that sultan rule can also be conceived as a supportive element for village administration such as settlement of problems among the villagers. Although the three sultans recognize legitimacy and means of rightful reign differently, they all suggest that claims for sultan-ship are their attempts to relocate their tradition so as to accommodate it to the Maranao society today.

はじめに

本稿は、フィリピン南部のムスリム社会の一つ、マラナオ社会におけるスルタン¹という称号が持つ歴史的意味と現代の変容について考察することを目的とする。ミンダナオ島やスールー諸島を中心とするフィリピン南部のムスリム社会は、スペイン植民地期にキリスト教化された他の地域とは異なり、ダトゥ (*Dato*) と呼ばれる貴族層による、独自の政治・経済・法体系を維持していた。ダトゥは共同体の指導者としての称号を名乗る権利を持っており、称号のなかでもスルタンが最も高位である。フィリピン地域でもっとも大きな影響力をほこったマギンダナオ、そしてスールー諸島のスルタンは、米国統治期以前には大きな権力を誇り、交易を支配しイスラームを保護し、王国を支配した。しかし、この伝統的な政治構造は、フィリピン南部が米国統治期、のちに日本占領期を経てフィリピン国民国家システムによって囲い込まれることによって変容した。ミンダナオ・スールーのムスリム社会でもっとも大きな勢力を持っていたスールーのスルタンは、1899年のべ

イツ協定によって米国の宗主権を認め、1915年にはカーペンター＝キラム協定によって米国主権を確認させられ、狭義の宗教的指導者としての権利以外を放棄した。

本稿で考察の対象とするマラナオ社会²は、マギンダナオやスールーの王朝とは異なり、他を圧倒するような強大な王国が誕生したことがなかった。伝統的にマラナオはパガンポンとよばれる4つの共同体から構成される緩やかな連合国家であり、それぞれの共同体も、唯一のスルタンによる支配ではなく、複数の首長による合議制の形式がとられていた。現在のマラナオ社会においては、スルトンの複数性がさらに進行し、より小さな規模の共同体にもスルタンと呼ばれる首長が存在している。「100人のスルタンがいる国」と評される³ことがあるように、一見資格のないようにみえる者がスルタンを自称することも可能にみえる。しかもマギンダナオやスールーのムスリム社会と異なり、マラナオ社会でスルタンという称号は、スルタンを首長とした間接統治をした米国の統治期以降に、盛んに用いられるようになった称号と考えられる。

本稿では、強力な王権の伝統を持たないマラナオ社会における、スルトンの称号がもつ複数の意味を考察する。以下、植民地期以前の政治構造におけるスルタンなど称号を獲得する権利を持つ仕組みについて概観した後、三人のスルタンを名乗る人物に焦点をあてる。一人目は、近年「スルタン・サミット」を組織し、マラナオ社会におけるもっとも強力なスルタンとされるスルタン・サ・マシウ、二人目はマラナオの伝統的な居住地である南ラナオ州都マラウィ市のスルタンを名乗るスルタン・サ・マラウィ、三人目はより小さな村レベルのスルタンを名乗るスルタン・サ・マライグである。三者はそれぞれバンサとよばれる伝統的な系譜によってスルトンの称号を名乗る正統性を得ながらも、その統治領域が異なるだけでなく、スルタンを名乗ることの現代的意味もまったく異なっている。ここではこの三人の男性にとってスルタンを名乗ることの意味を比較検討することにより、現代においてもみられるスルトンの名乗りをめぐるマラナオ社会の伝統的な政治文化を確認するとともに、マラナオ社会におけるスルトンの地位と現代フィリピン政治におけるスルタンを名乗ることにみられる戦略について考察を試みる。

1. 東南アジア・マレー世界におけるスルタン

マラナオ社会が属する海域東南アジアはマレー（ムラユ）・イスラーム世界と呼ばれ、マレー語のほかにイスラーム化された文化、服装、音楽、口頭伝承、商業、そして道徳や社会組織において共通性がある地域といわれる。13世紀以前はヒンドゥー、仏教の王朝が支配的だったが、15世紀からはイスラームの影響を多く受け、イスラーム商人や中国系商人、16世紀以降はオランダやポルトガルの影響の中広く交易が行われた。港周辺のほかに広がった王国のほかに、海につながる川沿いのデルタ地域には稲作が広がり、物産

が集められて流通がすすんだ。ここではイスラームは多くの場合交易と関連して現地の首長によって取り入れられ、一般への布教がすすんだ。

政治体制、王権については、マラナオをその一部とするマレー世界東部と西部とでは事情が大きく異なる。ジャワを中心とする西部地域では、植民地勢力による侵略以前は、ラジャと呼ばれる王による、官僚制をともなう王権が発達し、宮廷文化が栄えていた。ラジャを中心とする国家は、曼荼羅国家、劇場国家、銀河系国家などと現在まで説明されてきた。しかしブルネイ、スルー、マカッサル、ティヌイ、マギンダナオなどマレー世界の東部では、諸王朝の支配は常に流動的で、強大な王権が発達せず、規模が大きい共同体レベルでの首長制が維持された。それは早瀬によれば、領域と中心をあいまいにしたまま拡がっており、スルタンを名乗る首長が持つ権限は一時的で安定していなかった⁴。

2. フィリピン・マラナオ社会におけるスルタン

①植民地化以前

ミンダナオ島においては、16世紀はじめにマギンダナオ王朝がプラギ川流域周辺をおさえ発展し、マラナオを含む周辺の民族はその影響下にあった。イスラームは16世紀前半、カブンスワンという名のアラブ人によってもたらされ、1579年までに貴族層に浸透していたといわれる。主に血縁関係を通して周辺地域の支配者層に広められた。マギンダナオは17世紀に最盛期を迎えるが、この発展はナシル・ウドゥ・ディン (*Nasir ud Din*、通称クダラト、1616 - 71) という名の王の下での外国貿易によるところがおおきく、クダラトは1645年ごろから預言者の子孫という意味を込めスルトンの称号を用いるようになった。高名なバンディタとしてもしられ、イスラームの支援者を名乗った。

マラナオ社会へのイスラームの到達はマギンダナオとの関係からなされたもので、16世紀ごろといわれる。マラナオ社会にはイスラーム到来以前の創世神話が存在し、前イスラーム期の英雄は、ダランガンとよばれる抒情詩で読まれ現在まで讃えられている。イスラームの到達に関しては、タティブやサルシラ⁵において語られる。その際強調されるのはマギンダナオへ訪れたカブンスアンとの関係である。このようにマラナオの人々は、イスラーム到来以前とイスラーム到来後、二つの形式で共同体の創世と系譜について説明する。

マラナオは、理念的にはイスラームをこの地に伝えたカブンスアンに系譜を辿ることができると考えている。それを媒介するのはロクス (*locus*)、もしくはアポ (*apo*) などとよばれる共同体の祖先である。ロクスとは、一般に長老を意味する言葉で、生存している人をさすこともある。アポはよりさかのぼった遠い祖先をさす。これらの祖先をたどる系譜はバンサ (*bangsa*) とよばれる。バンサは祖先を通じて、またさらにさかのぼり別の

祖先を辿ることも可能である。したがって一般に人々は複数のバンサをたどることができる。メルビン・メドニック (Melvin Mednick) のおこなった調査によると、マラナオの人々は、誰もが複数のバンサを持ち、有力なスルタンやダトゥへつながるバンサの数は多ければ多いほどよいとされ、彼の調査では人々は平均して7つのバンサを持っている。バンサをもつことはある特定の祖先に由来する権利や義務を有することを意味し、そのなかには称号 (*grar*) を主張する権利も含まれる。バンサは、ある祖先へのつながりと称号を主張する根拠であり、その同じつながりと称号を主張できる人物は数多く存在する。マラナオ社会は双系であるため、自分の子どもの世代になると、婚姻関係を結んだ親族のバンサへの主張もおこなうことができるようになる。事実、マラナオ社会では結婚によってバンサを増やすことは望ましいとされる⁶。

複数の人間が、スルタンを名乗る権利を主張した場合、どのようにバンサの優劣が決定されるのだろうか。第一に重要なのは、複数の祖先の間の優劣（上位にあるバンサは *pegawidan*、下位は *pegawid* とよばれる）と、祖先への近さ（上位を *lokus*、下位を *apo* とよぶ）である。マラナオの神話によると、かつてこの地域一帯を治めていた王バンバラン (*Bembaran*) は、3人の息子にそれぞれ土地をあたえ、それらの土地はバヤバオ (*Bayabao*)、マシウ (*Masiu*)、ウナヤン (*Unayan*) と名づけられた。後に外部から別の支配者があらわれ、その者はバロイ (*Baloi*) という名の土地を治めることになった。こうしてマラナオの土地は4つの共同体（パガンポン、*Pagampong*）からはじまった。この4つのパガンポン＝共同体からなるマラナオ社会に、先述したカブンスアンが現われ、通婚することによってイスラームの系譜が編みこまれていった。このパガンポンより下位の政治構造（大きい順に *Suku* → *Inged* → *Agama*）では、その神話とバンサはより複雑になる。例えばパガンポンのひとつであるバヤバオの統治者が、家来の複数名にスクまたはインゲッドを与える。スク、インゲッド、アガマはそれぞれ複数の祖先にたどるバンサを持ち、その祖先同士にも、また同じパガンポンに属するスク間、インゲッド、アガマの間にも優劣——プガウイド (*Pegawid*、従属する者) とプガウイダン (*Pegawidan*、従属される者) の関係——がみられる。よって優越するプガウイダンであるロクスへと辿ることのできるバンサがより重要である。また支配的な祖先へのつながりが近いこと、すなわち遠い祖先 (アポ) よりも、より共同体の創始に直接的にかかわるロクスへの近さが重要である。通常たどられるのはロクスまでであり、ロクスは一つか二つの称号を保持している。

ただスルトンの称号の継承に関しては、バンサ以外に別の規則が設定される場合もある。例えば4つのパガンポンのひとつマシウの場合、祖先 (アポ) をアフマトウラ (*Ahmatula*) もしくはジャラルディン (*Jalaludin*) とする者が「カブガタン (*Kabugatan*)」とスルトンの称号を名乗る権利を持っている。かつては、仮にアフマ

トゥラを祖先とする者がカブバタンを就任すれば、同一人物がのちにスルタンとなった。そして彼がスルタンとなったあと、次にカブバタンとなるものは、ジャラルディンを祖先とする者のなかから選ばれなければならない。このようにバンサとは、ある時期における特定の祖先とのつながりを特定することであり、それはメドニックによると三つの条件がある。それは、①祖先からの権利と義務の継承についての合意、②関連した場所、③特定の祖先とのつながりである⁷。

スルタンの名乗りの歴史は、とくに 17 世紀後半にマギンダナオで強大な力を持ったスルタン・クダラトの時代以降、マラナオにもみられるようになった。しかし、例えば 18、19 世紀におけるマラナオ社会において、上記のような規則によってスルタンという称号がどの程度名乗られていたのかははっきりしない。先述したように、現在のマラナオ社会においてはロクスやアポと呼ばれる特定の祖先とのつながりを持った長老がおり、彼らは何らかの称号を保持し、それに伴った義務と権利を保有している。そのうちのいくつかの共同体では、祖先の中でも優位なバンサを継承しスルタンの称号を名乗っている。しかし歴史的にこの地域はマギンダナオの影響下にあり、それは河口近くのマラバンを通じてのものであったが、その地域からもとくに強大なスルタンが生まれてもいない。

また早瀬によると、海域東南アジア東部世界は、首長制の維持と、イスラームとは直接関係しない統治体制を一般的な特徴としている。強大なスルタンの力がある時期は非常に短く、通常の時代においては政治状況の変容に応じて王都そのものが移動するなどたいへん流動的で、経済活動は非イスラーム教徒との共同でなされるのが普通であった⁸。

マラナオの場合は、もっとも古く強大であったといわれるマシウのスルタンをさかのぼって聞き取りしても、現在から 11 代に届くのみである。このことを考えても、さほど強大な力をもたなかったマラナオの首長らは、現在のロクスのレベルと同様それぞれに称号を持つことがあっても、それらのより高位にある地位としてのスルタンは顕在しないか、したとしても非常に限定された地域への影響力を越えることはなかったのではないと考えられる。

②米国による植民地化とスルタン

米国植民地政府は、ムスリムなどの非キリスト教徒を、文明化されていない怠惰なネイティブとして軍政を敷いた。モロ州 (Moro Province) を設置し軍事支配を進めたあとは、イスラーム社会の「文明化」が試みられたが、貴族層は解体せず、首長を行政の協力者にする政策がとられた。

しかし、マギンダナオやスールーの社会では米国統治期以前にすでに、スルタンの権威は失墜していたとされている。スールーではスルタンに従わないダトゥが続出し、マギンダナオのスルタン・マンギンもダトゥの反攻にあった。こうしてスルタンを介した間接統

治ができないと判断した米国植民地政府は、民族区 (tribal wards)、民族区裁判所 (tribal courts) を設置し、その長をダトゥ層から任命した。しかし、米国植民地政府は 1906 年 4 月、民族ごとに 51 の民族区を設置し、そのうち 5 民族区はさらに 56 民族小区に分割しても地理的に分断された各集落のダトゥの権限が強かった。またマラナオの民族区裁判所では、1907 年の訴訟 1907 年 294 件のうちダトゥとサコップの間のもめごとで、ダトゥの権威が失墜し混乱状態にあったという⁹。

このように 20 世紀以降のスルタンは、王朝としての統治の経験を持つマギンダナオやスルーにおいてでさえ実体のある統治者ではなかった。一般のマラナオに関する聞き取りからは、スルタンとは米国統治期に米国にそのように任命された者のことを言うという説明が聞かれたことがある。米国植民地支配がダトゥの中から選ばれたものがスルタンと名づけられ、行政官となることによってプレジデントと呼ばれるようになったというのである。米国植民地政府によるスルトンの名づけが史実であるかどうかは別として、もともとさほど顕示されていなかったより大きな領域での支配が、米国統治によって設定され、それにスルタンという名が与えられたことが示唆される。

③スルタンと国民国家

国民統合がすすむアメリカ支配期後期、フィリピン・コモンウェルス政府を通じて、マラナオのダトゥの子息が植民地支配を受け入れ西洋的教育を受け、独立後の国政に参加していく例がみられた。フィリピン・ムスリム社会の伝統的で正統な統治者、指導者であった貴族層のなかには、米国の植民地支配以降、植民地官吏として積極的に支配に取り込まれていく者がいた。これは支配者の取り込み政策に応じる形ですすんでいった。とくに初代総督ウッドの後任者となった総督ブリス (Tasker Bliss) は、スルタンやダトゥの影響に注目し、ダトゥ制を修復、再編成して、植民地統治の安定を図ろうとした。藤原によると、ブリス総督による貴族層の取り込みは次のように行われた。第 1 に部族区制の族長を既に伝統的権威を持っている者に限定した。第 2 に裁判権をダトゥに残しながら、ダトゥ相互の紛争はスルタンではなく植民地行政 (部族区裁判所) に移管された。第 3 に徴税形態もダトゥの統制を利用したものに転換された。こうして植民地行政は、「協力者」を得たことで安定し、ウッドの施政期のような反米の武装抵抗は収束に向かった¹⁰。

ダトゥのなかでも「世俗主義統治原理を受け入れ、西洋近代文明の価値を積極的に認め、子どもにはアメリカ式の教育を与えて」いた者は、次々に起こる社会・政治変化に対して機会主義的に振る舞うことにより、その支配の正統性を維持しようとした。そうしたダトゥのなかには、戦前、戦中、さらに戦後の独立後の政治にもひきつづいて自らの権益を維持することに成功した者もいた。それは、米国政府の間接統治への参加のほかに、米国統治期、コモンウェルス政府期を通して、商品的農業や土地などへの投資によって新た

な財政基盤を築いたことにも起因する。正統なムスリムの支配者の家系や財産に、西洋の教育と植民地政治への参加という新しい付加価値を身につけたムスリム・エリートがこうして誕生した。コモンウェルス政府期から1950年代にかけて、段階的にはあったが、ムスリム居住地域に公選制が敷かれ、ムスリムの国政への参加が可能になった。独立後国会議員や地方要職に就任したムスリム・エリートの多くは、米国統治期にマニラなどで西洋式の大学教育を受けていたダトゥの子息であった。

3. 現代のマラナオ社会のスルタン

つぎに具体的な例をいくつか挙げ、彼らのスルタン就任にみられる地方政治、国、イスラームについて考えてみたい。

①スルタン・サ・マシウ

スルタン・サ・マシウの称号を持つトパアンは、南ラナオ州タンパランの町長であり、4つのパガンポンの統治のための会議の議長でもある。トパアンが第一回「統一と効果的なガヴァナンスのためのスルタン会議（1st Conference of Royal Sultanates on Unified and Effective Governance）」を開いた。2003年8月27、28日、マニラの高級ホテルで行われたこの会議には、マラナオのスルタンと、フィリピン政府の10の政府高官（Secretary, Undersecretary, Directorらが出席）で、それぞれの分野におけるスルタンとの協力について議論がなされた。スルタンと政府との協力が可能な分野として挙げられたのは、平和と法、商業と産業、財政、農業、観光、教育、農地改革、社会福祉、出稼ぎなどの分野であり、それぞれに政府からの代表を迎え議論がなされた。

4つのパガンポンの一つ、マシウのスルタンはその影響力の強さを誇ってきた¹¹。ある聞き取り（元タラカ町長、父がサルシラの保持者）によると、マシウのスルタンは現在11代目で、その総在位期間はわかっているだけで120年ほどになる。先述したようにマシウはラフマトウラとジャラルディンというふたりの祖先へと辿ることのできる者が、「カブガタン・サ・マシウ」および「スルタン・サ・マシウ」に就任でき、前者は後者のための準備期間としての称号で、カブガタンを経た人物がスルタンに移行できるという規則があった。しかし親族間の折り合いがつかず、3人のカブガタンが長期間にわたって就任したことをきっかけに混乱がおき、現在は3人のスルタンがスルタン・サ・マシウとして即位している状況であり、トパアンはそのなかでも最も正統とされているものである。

3人のうちの2人は町長、残る1人は技師と、マラナオ社会において経済的にも社会的にも地位が高いとされる人物である。そのなかでトパアンがもっとも分があると考えられているが、それは彼がマルコス政権下でリトル・マルコスとして恐怖政治を強いたアリ・

ディマポロの義理の息子という点が大きい。しかしそもそもディマポロの即位も、スルタンの位が混乱状態であったとはいえ、バンサにおいてより資格のあるとされている者が優先されないことで、政治力がサルシラやタルティブで決められた継承方法を凌駕した、戒厳令時代の好まざるべき即位であると見るむきもある。

つぎに参加者に配られたパンフレットから、この会議にみられる特徴について検討する。パンフレットには、大統領を含む22人の著名人、主要役職者からのメッセージが飾られている。このようなメッセージはマラナオ社会におけるスルタンの戴冠式にはよくみられる。パンフレットには主要閣僚のほぼ全員からのメッセージが盛り込まれている。例えばアロヨ大統領からは「スルタネイトをミンダナオにおける恒久的な平和、安定、持続的発展を実現するための政府の積極的なパートナーと資するこの会議は、強いフィリピンを建設するというわれわれの目標において重要である」というメッセージをよせ、会議に参加しあいさつをしている。マシウはアロヨが副大統領時代に「バイ・ア・ラビ・ディマサンカイ・サ・ピリピナス (Bai a Labi Dimasangkai sa Pilipinas)」という貴族の女性をあらわす称号を授与している。

さらにトパアンが強調するのは彼とマレー世界とのつながりである。パンフレットでは二人のマレーシア人がメッセージをよせており、トパアン本人の紹介のページにはマレーシアの要職との面会の写真が2枚掲載されている。また会議プログラムも、要職の挨拶の終わった後の最初の発表は、人類学者による「マレーシアとブルネイにおけるスルタネイト組織の歴史」から始まっている。

有力者との関係とその近さがわかりやすく示してある。パンフレットには、すなわちトパアンが統治を主張するスルタネイトとは、国家のなかでより重要な機能を果たすことのできる機構であり、それはマレーシアとの歴史的関係を持ったイスラームの支配である。ただし歴史の強調は必ずしも「伝統」の復活を意味しているわけではない。式は政府サイドとスルタネイトサイドが合議書を交わすという近代政治における一般的な方法で締めくくられるし、式はコーランの朗読で始まり、イスラーム復興の影響がみられている。

これを政府によるムスリム集団の取り込みと考えるのはたやすい。実際、このサミットが実施されたとき国政選挙は目前に迫っており、選挙では再選を目指すアロヨが連邦制の導入をちらつかせていた。連邦制が導入されればムスリム地域に関してはマレーシアの制度の踏襲が考えられるかもしれない。そうすれば現在の州をまたがって治める首長が必要となり、国家の統治機構の中のスルタン制が復活するであろう、というスルタン側の思惑をアロヨは利用できた。トパアンには自らの政治力を誇示する目的が合致した大掛かりな票集めのための宣伝ができたともいえるし、実際にマラナオのなかにはこの見方をするものが多い。

②スルタン・サ・マラウイ

スルタン・サ・マシウは16の会議の議長だが、スルタン・サ・マラウイは28の会議の議長である。スルタン・サ・マラウイ自身はマラウイ市長ではないが、近い親族が市および州の重要な役職についており、スルタン・サ・マシウ同様政治家の一家である。28の会議は16の会議メンバーをサポートする立場にあり、月に一回の28会議ミーティングは、彼の自宅であるマラナオ社会の伝統家屋トロンガンで行われる。30年前にマラウイのスルタンに即位した彼は、現在ムスリム・ミンダナオスルタン国連合（Federation of Muslim Mindanao Sultanates）の議長職もつとめている。スールーにはひとつ、マギンダナオには3つのスルタン国（マギンダナオ、カブンタラン、ブアヤン）があり、マラナオの代表（28会議の代表である彼）とともに会合を開くという。さらにマレーシアによれば、さまざまな機会にミンダナオの代表の1人として参加するという。

では彼はどのように現在の自らの地位を認識し、あるべきスルタンの統治をどのように考えているのだろうか。現時点の彼にとっての関心事は、ミンダナオの人々が経験している種々の経済的、政治的不公正をスルタンがどう正すかだという。ただし現在ではスルタンがスルタンであることのみで絶対的な権威を持つとはいえず、十分に能力が発揮できていない。スルタンが政治権力を持たないため、町長、知事といった地位を利用しなければ政治に参加できない。これを打開するためには、国家がスルタンの任命役割を果たすべきであり、国家によるスルタン制の復興がムスリム社会の発展に最も有効で必要であるとす

る。

さらに彼は次のように現行の政治を批評した。彼によると現在のムスリム社会においては、民主主義で多数の意見を採用することが正義を腐敗させている。それはミンダナオの人々が分断され混乱しており、正しく効果的な政治を執る指導者を選ぶことができないからだという。効果的な政治指導者を選べないことが経済的周辺化を悪化させている。例えば国営電力公社との問題がその例であるという。マラナオが多く住む南ラナオ州はその水源を用い電気をビサヤ諸島まで供給している。それはスルタンによると毎年1億ペソにもぼる。しかし地域を代表する政治家が腐敗しているため、南ラナオ州の経済にはまったく還元されない。スルタンはそれに抗議し、1%を税として収めるように提訴している。高位のバンサを持つスルタンは、バンサのもつ権威が人々の敬意を集め、スルタンは人々に愛を注ぎ保護しながらより適切な政治を行うことができる。連邦制が実現されることで、スルタンが首相となり立法、行政の指導的役割を担うとともに議会制を両立させたいと説く。

③スルタン・サ・マライグ

以上検討してきたように、バンサとそれが決定する権利を決して超えない方法で主張さ

れ、現在までスルタンは継承され主張されてきた。先述の二人のスルトンの政府高官との交渉は、その規模は異なっても、政府の有力者を自らの権威を認める後援者としようとする試みであった。より高位の強力なバンサを主張し、それにもとづいた権利の獲得を願い、自らをそれに値する人物だと認めさせること、それがマラナオ社会における日常生活のなかの政治であり、スルトンの主張はその文脈のなかにある。

しかし、このような伝統的なバンサの主張と権利の主張とは一戦を画するようなスルトンの実践もある。弁護士であり大学教授でもあるスルタン・サ・マライグは仕方なくスルタンになったのだという（ただし無理強いされたとはいわないようにと親族から念押しされたという）。マライグは大きな町バリンドンのなかに位置する地域¹²である。人口は約2,000人で、祖先（ロクス）は5名、それをたどる6つのダトゥの主な家系が存在し、それぞれが称号を持っている¹³。彼らは評議員としてスルタンを補助し、月一回の会合を持つ。スルトンの統治範囲は5村（バランガイ）にまたがっている。彼は2004年4月に即位した6代目で、先代のスルタンは彼の父方からみても母方からみてもオジにあたる。

その伯父が死去したとき長男であり高い教育を受けている彼が即位するようにと親族から説得された。しかし、スルタンになれば様々な行事に参加し、金銭的な支援をする義務も生じるため、経済的に余裕のある町長が就任したほうがよいと辞退した。しかし最終的に受諾したのは、長老たちの強い要望を断ることができなかつたためである。5名いるロクスをたどるバンサにおいて、初めて自分のロクスが二回目である。この規則を維持するためにも絶対に順番を飛ばすことはできないといわれ、受諾した¹⁴。

行政学を教えている彼は、自らのスルタンとしての仕事を地方行政学の講義をするように説明した。そこでのスルタンは、村を超えるが町を超えない範囲でのもめごとの調停者である。彼はまずバランガイ・キャプテン (*Barangay Captains*、村長) と協力して統治に当たるため、彼らにカサンガン (*Kasanguan*) という称号を与えた。そして儀礼の執行以外の主な活動であるもめごと (*Rido*) の解決のため、賠償金が1万から1万2千ペソの場合はアガマ、2万から5万の場合は町 (*Municipality*) に助けを求めるといふ。

もう一つの重要な自分の役割は、宗教行事を円滑におこなうことであるという。ここで彼は前スルタンとの違いを強調した。宗教行事は宗教指導者であるイマムと共に行う。マライグにおけるイマム (*Imam*) はダトゥの家系から選出される貴族の称号でもある。それは以前から同じであるのだが、先代のスルトンの就任式の際は砲撃を行ったり、伝統的な謡が何日も続いたりしていた。しかし自らの就任式ではこれらをコーランの朗読やウラマーによる説教に変えた。マライグだけではなく多くの地域でイスラームの儀式の内容が変化し、より中東に留学したウラマーらの意向に沿ったものとなっている。また彼は代々のスルタンが重んじてきたサルシラの朗読やバヨックによる賛美などに関する知識をあまり持たない。つまり自分のバンサをたたえ、地域を賞賛することを理解する知識もその方

法を知ってもいない。彼のスルタン政治とは、地方政治の末端を分担して担うことである。

おわりに

以上、マラナオ社会の現在における3人のスルタンの事例を紹介してきた。スルタン・サ・マシウとスルタン・サ・マラウィは、フィリピンにおいて議論されている連邦制への動きのなかで、自らをミンダナオ・ムスリムの正統な代表者であることを主張するためにスルタンという称号を名乗っている。既に述べたように、伝統的には他地域にみられるようなスルタン制を採用した王権はマラナオ社会に誕生することではなく、合議制にもとづいた緩やかな4つの連合国家であった。スルタンという称号は、貴族層の長老によって構成される会議の議長などに付与される称号、といった程度の意味しか持たなかったであろう。マラナオ社会でスルタンの称号がより意味を持ち始めるのは米国統治期以降のこととみられる。

スルタン・サ・マシウとスルタン・サ・マラウィは国民国家の地方行政の改革の動きのなかで、地方首長としての地位を主張するためにスルタンであることを名乗ろうとしている。しかしその際のスルタンは、とくにスルタン・サ・マシウの例に見られたように、過去から引き続いた栄光の歴史の継承者でなければならない。これはホブズボームが『創られた伝統』のなかで例証したように、現代に合致したかたちでなされる正統性の主張とも考えられる。スルタン制に超域的な権利を持たせたい二人のスルタンは、国家がスルタン制に基づいた連邦制を敷き、紛争へスルタンを介入させるなど、政府がスルタンの超域的な権威を付与することを望んでいる。これらのスルタンは、バンサとそれが決定する権利を決して超えない方法で主張されており、「ムスリム」や「マラナオ」など共同体の利害の代表者としての立場は二次的なものであるという、一見奇妙な意味の転換がおこっている。しかしこれは、政府の有力者を自らの権威を認める後援者とし、より高位で強力なバンサ、ここでは国家へのアクセスを主張する試みとして理解しうるものである。

他方、スルタン・サ・マライグの事例は、現代のマラナオ社会におけるスルタンという称号の持つ別の側面をみせている。バランガイ（村）レベルにおけるスルタンは、特にさしたる利益を得ることもないどころか、村や親族のなかでおこなわれる様々な行事に対する時間的、経済的負担を強いられる、できれば引き受けたくない役職にすぎない。このようにみえてくると、スルタンという称号は、共同体の外部に対しては、共同体の首長であることの正統性の根拠となり、政治権力を獲得する手段として理解されている一方、共同体内部では、政治的権威をほとんど持たない地位であることがわかる。

このような、マラナオ社会におけるスルタンという称号のある種の「軽さ」は、近年の

新しい現象というよりも、マラナオ社会の伝統的な政治構造を反映した政治文化といえる。しかしながら、現代フィリピン政治における対ムスリム政策や地方分権化の議論との関係のなかで、スルタンという称号が再び意味を持ち始めていることには注視する必要がある。共同体外部の国家権力、そしてイスラーム世界との動態を考慮しながら、スルタン制に関する議論も広い意味での「イスラーム復興現象」の一部として捉えることを視野に入れ、さらなる検討をおこなう必要があるだろう。

参考文献

- 藤原帰一「イデオロギーとしてのエスニシティー—米国統治下における「モロ問題」の展開」『国家学会雑誌』97巻7-8号、1984年、508-529頁。
- 早瀬晋三『海域イスラーム社会の歴史—ミンダナオ・エスノヒストリー』、岩波書店、2003年
- 川島 緑「フィリピンにおける国民統合体制の成立—1950年代ムスリム・エリートの役割を中心に」『アジア研究』36巻1号、1989年、41-88頁。
- Majul, Cesar Adib, *Muslims in the Philippines*, University of the Philippines Press, 1979
- Mednick, Melvin *Encampment of the Lake—The Social Organization of a Moslem-Philippine (Moro) People*, Dissertation Submitted to the Faculty of the Division of the Social Sciences, University of Chicago, 1965.
- Saber, Mamitua *20th century Maranao Authority System: Transition from Traditional to Legal*, Mindanao Journal University Research Center, MSU, Marawi City, Philippines, 1979
- Tawagon, Manuel R. *The Pengampong: Multiple Sultanates of Lanao*, *Mindanao Journal* vol. 1-4, University Research Center, Mindanao State University, Philippines, 1989-90

注

- (1) スルトンの日本語表記は、イスラーム世界の一般的な発音により近い「スルターン (Sultān)」が採用されているが、マレー世界ではスルタン (*Sultan*) と発音されることが多い。ここではマラナオ社会における発音に近い表記を採用した。
- (2) 本稿は、マニラ、南ラナオ州マラウィ市と近郊の村落で1999年1—3月、2001年4月—11月、2002年1月—2003年5月、2004年3月—2005年3月に行った聞き取り、参与観察をもとに構成している。これらの調査は松下国際財団、国際交流基金次世代フェローシップの支援によって可能になった。ここに記して感謝いたします。
- (3) Tawagon, 1989
- (4) 早瀬、2003
- (5) タルティブとは、共同体のスルタンやダトゥによる統治の作法や決まりごとについての慣習をあつめたものの集成であり、一般的には口頭伝承によって伝えられる。他方、サルシラとはある共同体の創始にかかわる系譜である。
- (6) Mednick, 1965
- (7) Mednick, p. 80-81.
- (8) 早瀬、前掲書
- (9) 早瀬、138頁
- (10) 藤原、53-55頁
- (11) Mednick, p. 159
- (12) 先代のスルタンは彼のおじであった (父方および母方=父と母は第2いとこ)。もともとこの地方にはワト (Wato) とラヤ (Raya) という二つのアガマがあり、マライグはワトに属していた。

- (13) それぞれの称号は、アンプアン (Ampuan)、ラボガタン (Labogatan)、ラジャムダ (Rdiamuda)、スルタン・サリプ (Sultan Sarip)、ダトゥ・ア・カブガタン (Dato a Kabugatan)、スルタン・ラジャムダ (Sultan Rdiamuda) の 6 つである。
- (14) 最初のスルタンは曾祖父である。